

上演7 秋田県代表 秋田県立秋田南高等学校 作 RITZ 「ヒミツノキチ」

講評文

青森県立五所川原高等学校 中村珠李

自分の思い描いた未来にならなかったここなと、10年前から時が止まっているりおなの二人の姿を通して、過去への後悔はあっても、未来をそんな簡単に変えることなどできないのだと突きつけられました。また、この劇で描かれる「夢」と「現実」の乖離は、進路選択を迫られる私たちにとって、あまりにも切実な問題として胸に響きました。親や大人が子供のためを思って言う「現実を見なさい」という言葉が、時にどれほど残酷に響くか。そうした葛藤が生々しく描かれていたからこそ、劇中の彼女たちの姿に、自分自身の現在を重ねずにはいられませんでした。

また、私が深く考えさせられた点は、なぜここなはりおなに出会ってすぐに「目を覚まして」と言わなかったのか、という点です。ここなは、目の前にいるりおなは本物ではなく昏睡状態にある彼女の"意識"だと理解したはず、それなのになぜその時点ですぐに「目を覚まして」と言わなかったのか。それはここなの優しさだったのかもしれないと、私は受け止めました。もし突然、目の前のりおなに全てを話して「目を覚まして」と言ったとしても、混乱してしまうでしょう。それに、現在バスケット部の外部コーチとして、夢と現実の狭間で揺れる生徒たちを見ているここなだからこそ、せめてこの時のりおなには、もう目を覚まさないかもしれないという彼女に、厳しい現実を見せないでいたいと思ったのかもしれません。しかし後々、りおなが全てを思い出したタイムカプセルの約束までも思い出した時、ここなの中では「もしかしたらこれは都合の良い夢や幻覚なのかもしれない」という疑念もあったはずです。それでも、二人の「約束」をまだ覚えているならと淡くとも希望を捨てていないここなの切実さや、りおなを信じる友情の強さに心を打たれました。

演出について、現在の演劇部員たちが夕日側に向かって歩いていく場面で、片側のSSのみを当てることで、ここなの表情だけが見えなくなっていました。あえて表情を影にすることで、ここな自身は過去の場所に留まりながら、生徒たちがまだ見ぬ未来に向かって歩いていく背中を見守っている、そんな様子が暗示されているように思いました。素敵な舞台を、ありがとうございました。